児童をすこやかに

═ 必要な家庭・学校・社会の相互補完 ═

児童は次代ののにない手です。学校のみならず、家庭、社会などあらゆる領域を通じてその健全育成につとめなければなりません。

ここでは、福祉、社会教育両面から児童の健全育成をとらえ、児童をとりまく環境の現状と問題点、健全育成のための諸活動の紹介、有識者の提言、県の対策等を内容とし、健全育成のめざすところ、その必要性を考えたいと思います。

◇児童の健全育成について

児童は次代の宝

（児童憲章）

すべての児童は　心身ともに
健やかにうまれ　育てられ
その生活が保障される。

無限の可能性をもつ子等に望むものは何か。私達は、改めてみる必要があると思います。日本の人口動態は少産少死であるために、将来は働き盛りの者が少なく、その少ない人々で生産をあげ、増加する老人の対策等、多くの福祉施策を担っていかなければなりません、また、対外的にも資源に乏しく狭い国土のわが国は、将来あらゆる問題をかゝえることになるでしょう。

今や次代を担う児童に寄せる期待は大きく、養護・教育がいかに大事であるかが痛感されております。児童を心身共に健やかに育てあげることは私達に与えられた課題です。

児童の健全育成については単に学校等関係機関の力に頼るだけでなく、地域的にも大きくこれをとりあげ互いに連けいをとりつつ展開すべきです。

健全育成の必要性

児童は一般的にみて、親の保護のもとに多くの時間を家庭で過ごしつつ学校に通学し、学業を修めることが大事な日課であり、また、一方、近隣や地域社会の中で友達や大人たちに接しながら社会生活を体験していきます。すなわち、家庭・学校および社会の三つの場で生活し、それぞれの場から大切な教育作用を受けつつ成長していくところに、この時期の人間形成の特徴がみられます。

これまでわが国では、学校教育に大きな期待がかけられたことから、家庭教育や社会教育の役割が十分に認識されなかったり、三者の有機的関連が見失われたりする傾向が見られました。このような傾向が、児童の全人的な成長にとって、問題を生じやすいことは明らかであり、そのうえ、今日の急激な社会構造の変化は、児童の教育に新しい問題を投げかけつつあるといえます。すなわち、核家族化に伴う家庭の教育条件の弱体化、都市化による自然環境からの隔絶、マスコミに便乗する不良図書、映画のはん濫、交通災害、各種公害の激増などです。

こうした事情のもとで、すべての児童が、心身共に健やかに育っていくためには、やはり、家庭、学校、社会教育のそれぞれの立場で、家庭における家庭教育上の両親の役割や、学校教育における知育偏重の欠点などを十分に認識し、家庭・学校教育では得がたい体験を通して、自然に親しむ敬けんの念を育て、集団宿泊を通じて、規律、協同、友愛、奉仕の精神を育てるなど、それぞれに独自の役割を発揮することは勿論、相互補完的な立場で進められることが、きわめて重要なことです。

私の提言

児童をすこやかに

甲斐直義

児童をすこやかに成長させることは、社会の構成者指導者としてのおとなの最も重要な義務の一つである。この事は一応誰にでもわかっている。それなのに現実は必しも、「すこやかな子ども」ばかりが育っているわけではない。もちろん行政や教育面において、児童福祉や社会教育等の活動をとおして、その改善への努力が年々充実されていくことは、うれしいことであり、このような「縁の下の力もち」的な仕事に労を惜しまず、奉仕的にがんばっていられる関係者の方々には深い敬意を表したいと思う。それなのに、現実に、「青少年の非行」は増大ししかも次第に低年齢化しつつあるという。小学生でさえも、補導の対象になると考えた人が十年、二十年前に、はたして何人いたであろうか。半面に、子どもは親や教師、その他地域社会の人々により、必要以上に甘やかされ、心身ともに弱められ、スポイルされて行きつつある。連休だ、レジャーだといえば「子どものために」とばかり、親は、高価なレジャープランを立て、子どもにかしづき子どもにふりまわされて、くたくたになって家路につく。それが「子どものため」どころか逆に子どもの心を虫ばんでいることには、全く気がつかない。

このような現状をふまえて、私は次の提言をいたしたい。

第一に、今日、子どもの成長発達が速まっていることを、世間は、再認識すべきである。非行の低年齢化もその一つのあらわれだが、この発達の加速は、不可抗力の事実であることをここに改めて提言したい。幼稚園児でも五歳児になると行動も落着いて来るし、知性もびて来る、性的発動や性的関心が小学校上学年でおこるのも必然の事実である。「まだ子どもだ」という親や教師たちの固定した子ども観を捨てて、流動的に子どもをとらえよう。社会福祉においても、社会教育活動においてももっと流動的に子どもをとらえる努力をのぞみたい。

第二に、現代の子どもはあまりにも弱すぎる。心身の両面にわたって、もっと幼い頃から、子どもをきたえねばならない。たくましい子どもはある意味では親からつき放される子どもでもある。今の親は一体に過保護だから、子どもをつき放しても、冷酷になる心配はまずない。「子どもはつとめて、戸外でのびのび遊ばせよう」「子どもが遊べるような環境を、おとな全部が、努力してつくってやろう」。

（熊大教育学部教授）

◇児童問題の現状と問題点

家庭・社会の教育機能の低下

戦後三十年、諸外国に例をみない経済成長をなしとげたわが国も、七十年代になって、そのひずみに対する反省から、ようやく福祉施策優先の声が高くなってきました。なかでも次の時代を担う児童の福祉につきましては、教育、保健の問題等、種々のニードに応じ各種施策や施設の整備が図られてまいりましたが、その整備が進むにつれ、一般に子供の養育は学校や児童福祉などの施設がすべきものという考えが広まり、本来まず親にあるべき養育の責任を他に転嫁する風潮があり懸念されている現状です。

児童の人格形成は親子関係等生活領域の環境を基に体験したものの蓄積により良くも悪しくもなるといわれます。このように児童にとって環境、特に家庭環境こそ最も重要なものです。

私達の周囲にはこの児童をとりまく環